



| | |
|--------------|---|
| Title | 齋藤文法におけるpassive voice の位置づけと定訳「受動態」について |
| Author(s) | 佐古, 敏子 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 37-44 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/69926 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

齋藤文法における passive voice の位置づけと定訳「受動態」について

佐古敏子

1 はじめに

今日の学校英文法において、文法範疇 voice はどのように定義されているのであろうか。清水護は「主語がその述語動詞の表す動作の発動者である場合と受動者である場合とでは動詞の形態が変わる。この動詞の形態の変化を態 (Voice) という。」と定義する¹。では、こうした形式に、なぜ、voice という文法術語があてがわれたのであろうか。また、我が国の英文法書における「態」という訳語も、いったい、どのように生じたのであろうか。英学を研究するにあたり、避けられない疑問であろうと考える。

しかし、筆者の研究の意図は、我が国の英学史、狭義では、我が国の英文法史（本稿では、以下、英文法史と称す）における各品詞の位置づけ、文法術語と概念の変遷、ならびに、その訳語の由来を究明することにある。したがって、本稿では、上掲の後者の疑問、具体的には、我が国の英文法書における voice の位置づけとその概念の変遷、ならびに、定訳となった「態」という訳語の由来について検討を行う。

さらに、「態」をはじめ、「学校英文法」として定着した各文法術語が齋藤秀三郎『新標準英文典』²で用いられた訳語に負うものであることは周知のところではあるが³、こうした齋藤文法に継承された文法術語が創出されたのは、はたしていずれの英文典においてであったのであろうか。この問題も本稿において明らかにすべきであると考え。我が国の英文法史において、上述の文法術語、概念の変遷にまつわる内容的考察に特化した先行研究では、明治中期以降の英文法書に関する研究が多く確認できるものの、英学黎明期⁴と称される幕末から明治初期⁵における訳述英文法書（以下、英文典と称す）と上掲の齋藤文法との関わりを検証する研究については、ほとんどなされていないのが実状である。

しかしながら、筆者は、むしろ、英学黎明期の所産である英文典においてこそ、齋藤が用いた訳語が創出された可能性があるのではないかと推定したい。本稿で、その起源を探究したいと思う所以である。

上述の研究意図に沿い、本稿に先立って、筆者は、まず、英学黎明期から明治初期にかけて幕府に献上、あるいは、刊行された英文典を対象に検討を行った。そうした英文典が扱う文法範疇のうち voice、ことに passive voice を例として、その概念が如何に受け容れられ、どのような訳語があてがわれていたかを中心に、それらの変遷過程について検討を加えることで、当時の英文法体系にまつわる英学の実状を考察した⁶。和蘭文法における lijdende werkwoord⁷ (passive

¹清水は、さらに、「第一の主語が動作を自らおこなう場合の形態が能動態であり、其れに対して、第二の、動作を受ける場合が受動態である。受動態は俗に「受け身」と呼ばれる。」と定義する。（清水護『英文法辞典』培風館、1965、p.434）。

²日本人英学者による「学習英文法」として、初の完成版とされる英文典。上下巻、吾妻書房、1949-1950。

³上掲書（脚注2）に関する伊藤裕道による評価を以下に示す。齋藤文法における術語が定訳となったことを示す証左といえよう。「日本人による本格的な文法書として初めて登場し、（中略）一方で今日の英文法学習にも齋藤文法（用語）が脈々と受け継がれていることを、他方でその鋭い科学的洞察を見てみたい。」（伊藤(2000)、p.113）。

⁴「英学黎明期」の定義については諸説あるが、以下、定宗数松による定義を引用する。

「フェートン号事件（1808）からガイド・フルベッキ等が教鞭をとる開成学校設立（1870頃）に至るまでを「英学黎明期」と区分する。」（『日本英学物語』三省堂、1939、p.9）。

⁵日本の英学史、教育史において、明治初期とは文明開化の明治元年(1868)から学制廃止、教育令交付の明治12年(1879)までをさすが、筆者は、我が国の英語教育が輸入本とその訳述本（本稿では英文典と総称）に頼る時代だと考える。それゆえ、拙稿（脚注6で後述）では、明治20年(1887)までを我が国の英学初期と捉え、この年までに刊行された英文典を検討対象とした（中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』二書房、1884ならびに、源綱紀譯述『ブラウン氏英文典直譯全』の場文林堂、1886）。

⁶「幕末から明治初期の英文法書にみる概念、文法用語の変遷 —Passive voice に纏わる変遷について—」『言語文化共同プロジェクト2014 言語文化の比較と交流 2』大阪大学大学院言語文化研究科、2015、pp. 57-70

voice) について、すでに豊富な知識を備えていたであろう蘭学者たちは、英語の *passive voice* の特質について、あるいは、例文(句)が意図するところを、当時、どの程度まで理解できていたのであろう。また、どのような訳語をあてがっていたのであろうか。上述の拙稿では、そうした問題を考察することで「我が国の英学事始め」の一端を明らかにすることができたように思う。その結果を踏まえ、本稿では、今日の学校英文法の礎とされる齋藤文法、ならびに、それに先行する明治初期から中期の英文典における *passive voice* の位置づけ、さらに、その概念について検討し、くわえて、上述の拙稿において調査対象とした「我が国の英学事始め」の所産である種々の英文典の中で、齋藤文法への影響を与えた英文典はいかなるものであったのか、その実状についても考察する。

2 先行研究とその問題点

我が国における日本英学史研究、英語教育史研究は、江戸後期より明治期に持ち込まれた英文法書(以下、原書)ならびに、英文典(訳述英文法書)に関する書誌学的研究、あるいは、その訳述編者に関する伝記的研究が主であった。結果、その内容的な考察、ことに文法術語、概念に関する研究は多くはなされていないのが実状であろうと考える。

そうした限られた先行研究のうち、英学黎明期から明治初期に持ち込まれた原書とその訳述書である英文典を対象に、*passive voice* に関する上述の拙稿を纏める際に参考とした研究(便宜上、これを①とする)と、それらの英文典から影響を受けたであろう齋藤秀三郎による英文法書の文法術語を調査対象とする本稿において参考とした研究(これを②とする)を以下に列挙する。

①に関して、「英学事始め」における英文典の内容的考察に特化した先行研究としては、重久(1932)をはじめ、竹村(1933)、井田(1968)、杉本(1993)、伊藤(2000)、水野(2005)、岡田(2006)および朱(2009)が挙げられる。しかし、その中であって、重久、竹村、岡田および朱は、主に文法術語についての一覧表作成に留まった研究である。各文法範疇、ことに本稿のテーマである *passive voice* の解説、例文(句)などの内容に踏み込んだ研究となると、井田、杉本、伊藤および水野に限られ、和蘭文法、日本語文法との関連を視野に入れても、飛田(2008)、斉木・鷲尾(2011)と、その数はあまり多くはない。他方、②に関しては、上に挙げた井田、杉本、伊藤ならびに水野に加え、出来(1990)、北山(2010)、齋藤(2011)、柳浦(2011)、井手(2012)のほか、①とは対照的に、多数の研究が確認できる。

しかし、管見によれば、これらの先行研究においては、解説、例文(句)について、各英文典とそれぞれの底本であろうとされる原書との比較、照合が詳細にはなされていない。よって、筆者は、英文典と原書とを照合の上、両者における異同の有無に重きを置き、それぞれの *passive voice* に関する解説、例文(句)ならびに訳語の推移について考察を試みたいと思う。

3 研究対象と研究方法

前述の拙稿において筆者は、英学黎明期に刊行された英文典とその底本、あるいは底本とされる英文法書(原書)とを照合することで、両者間の異同の有無、ならびに、その要因を調査し、当時の英文典における *passive voice* の概念の捉え方、訳語、および例文(句)の推移について考察した。その結果を踏まえて、本稿では、先述のとおり、「受動態」という訳語が定訳となるに至る過程で、我が国の英学初期の所産である各英文典が齋藤文法に及ぼしたであろう影響について検証すること、さらに、その訳語が創出された英文典を究明することを目的とする。

したがって、調査対象を齋藤文法とその周辺、具体的には、齋藤秀三郎(1866-1929)、スウィントン(William Swinton 1833-1892)、およびブリンクリー(Francis Brinkley 1841-1912)の文法書に絞り、文法範疇 *passive voice* の位置づけ、さらに、その概念について、第4節で検討する。そして、参考までに、齋藤文法とならんで明治中期を代表する神田乃武(1857-1923)の英文法書における *passive voice* の位置づけと訳語についても検討を行い、その結果を齋藤文法と照合することで、神田の文法書と齋藤文法との関わりについて考察したいと思う。

⁷和蘭文典では、いささかの例外はあるものの、多くは、これに「被動詞」あるいは「受動(働)詞」の訳語があてがわれる。

4 齋藤文法とその周辺にみる passive voice の位置づけならびに定義

本節では、齋藤による文法書とその周辺について考察するが、それらを順次、取り上げるにあたり、はじめにスウィントンの文法書⁸について調査、分析を行う。齋藤が全編英語による我が国初の学習英文法書を著す際に依拠した原書が、他ならぬスウィントンによるものであることがその理由である。

4.1 スウィントンの英文法書について

スウィントンの英文法書における voice に関する記述は以下のとおりである。

Voice is a grammatical form of the transitive verb, expressing whether the subject names the actor or the recipient of the action.

There are two voices: I. THE ACTIVE VOICE. II. THE PASSIVE VOICE.

Active, — A verb in the active voice represents the subject as acting upon an object : as —

Watt *invented* the steam-engine.

Passive, — A verb in the passive voice represents the subject as receiving an action : as —

The steam-engine *was invented* by Watt.

(下線一筆者) p. 54

スウィントンは、voice とは他動詞 (transitive verb) の主語が動作主であるか受動者であるかを示す文法上の形態 (form) であり、active と passive の二種類に分かれるとしており、そこに適切な例文も確認できる。

4.2 齋藤秀三郎の英語と日本語による英文法書における記述

明治期に入り、我が国ではピネオ (Timothy Stone Pinneo, 1804-1893)、カッケンボス (George Payn Quackenbos, 1826-1881)、ブラウン (Goold Brown, 1791-1857) による英文法書、さらにベイン (Alexander Bain, 1818-1903)、そして先述のスウィントン等の英文法書が相次いで輸入、翻刻され、間もなく、大学南校や慶応義塾、さらには各地の私塾で英語教材として多く用いられるようになった。

しかし、こうした文法書は元来、英語母語話者を対象としたものであったため、やがて、日本人学習者向け英文法書が次々と出版されるようになったのである。そうした中であって、齋藤秀三郎が上述の文法書を発表した⁹。では、齋藤は voice については、どのように捉えていたのだろうか。以下、当該箇所を引用の上、検討を行う¹⁰。

Verbs are divided into two main classes, *Transitive* and *Intransitive*. (中略)

A Verb is **Transitive**, if it is followed by an Obeject. Examples : (中略)

A Transitive Verb becomes a **Passive** Verb, when the Object of the action is made the Subject of the sentence.

Active : — Bakin *wrote* the “Hakkenden.”

Passive : — The “Hakkenden” *was written* by Bakin. p. 2

VOICE.

A Transitive Verb can be used in two different ways: —

I. In the Active Voice, with the Agent as Subject.

II. In the Passive Voice, with the Object of the Action as Subject.

(下線一筆者) p. 51

⁸W. Swinton, *A Grammar, containing the Etymology and Syntax of the English Language*, New York, 1878.

⁹H. Saito, *Practical English Grammar*, Two-volume Edition, Tokyo, 1898 (Vol. I, II), 1899 (Vol. III, IV).

¹⁰いずれも Vol. II からの引用である。

齋藤によれば、他動詞には二通りの用い方があり、これを **voice** (**active voice, passive voice**) と称する。他方、スウィントンの上掲書では、**voice** とは他動詞の文法上の形 (**a grammatical form of the transitive verb**) であるとしている。また、スウィントンが用いた例文は「**Watt invented the steam-engine. / The steam-engine was invented by Watt.**」であるが、これに対し、齋藤は、「**Bakin wrote the “Hakkenden.” / The “Hakkenden” was written by Bakin.**」という例文を用いている。ここに、当時の英学を学ぶ日本人への配慮を垣間見ることができよう。

齋藤が著した上掲書は、後に日本語版¹¹が上梓された。これを見れば、英語版における術語に的確な訳語（今日、定訳となった文法術語）を与えていることがわかる。以下、その引用に際し、当該箇所解説が長きに渡るため、要約の上、これを示す。

英語にあつては、**Verb** が或ることを述べる場合、先づ **Person** (人稱) と **Number** (數) といふ二つの文法上の關係、及び **Voice** (態)、**Tense** (時相)、**Mood** (法) といふ三つの動詞の属性を表はさねばならぬのであるが、その種々の形のうち **Verb** 其物の **Inflection** (語形變化) に依つて示されるものは極めて少數であつて、あとは皆 **Auxiliary Verb** (助動詞) の助けを借りるのである。

(I) **PERSON** (人稱) と **NUMBER** (數)。(中略)

(II) **VOICE** (態)。— **Transitive Verb** (他動詞) の **Active** (能動) と **Passive** (受動) の形をその **Voice** (態) と云ふ。

Verb が **Active Voice** (能動態) である場合には、**Subject** (主語) の表はす人なり物なりが、**Object** (目的語) の表はす人なり物なりに、何らかの行爲を加へることを示す。

Verb が **Passive Voice** (受動態) の場合には、**Subject** の表はす人なり物なりが、他の人なり物なりから何らかの行爲を受けるのである。(下線一筆者)

Active: — *He teaches the boy.* (彼が少年を教へる。)

(“He” が “the boy” に “teach” する行爲を加へるのである。)

Passive: — *The boy is taught.* (少年が教はる。)

(“The boy” が “teach” する行爲を受けるのである。) pp. 288-289

ここでは、**voice** (態)、**tense** (時相)、**mood** (法) を動詞の属性と捉えている。さらに、先の英語で書かれた文法書では、**voice** は他動詞の用法であり、**active voice** と **passive voice** の二種類に分かれるとしていたが、本書では、「**Transitive Verb** (他動詞) の **Active** (能動) と **Passive** (受動) の形をその **Voice** (態) と云ふ」と指摘している。また、**active voice** (能動態)、**passive voice** (受動態) という、まさに今日の定訳となった訳語も確認できる。

齋藤は *Practical English Grammar* (1898-99) の中で、その底本であるスウィントンの文法書 (1878) が、**voice** を他動詞の文法上の形 (**a grammatical form of the transitive verb**) と定義しているのに対し、これを用法と把握していたが、『齋藤新標準英文典』(1934) では、**voice** を「用法」ではなく、「形」と認識し、これに「態」という訳語を充てている。

推測の域を出ないが、齋藤が英語版の文法書で **voice** を用法と把握していたのは、**Sweet** (1891) の影響によるのではないかと¹²。スウィートの文法書の刊行年からして、齋藤がこれに依拠したことは十分に考えられる。

これに対して、日本語版では、齋藤に加え、編訳に携わった正則英語学校出版部が、英語版の底本であるスウィントンの文法書に倣って、**voice** を **form** 「形態」と捉え直したのではないかと。

さらに、齋藤は、先述の拙稿で検討対象とした「英学事始め」と称される我が国英学初期における英文典において、**form** すなわち「形態」を意味する文法術語として用いられた数種の訳語を吟味した結果、「態」という訳語をあてがったのではないかと推論されよう。しかし、齋藤文法と齋藤が依拠したであろう「英学事始め」の英文典との関連については後述 (第 5 節) すること

¹¹ 正則英語学校出版部訳纂『齋藤新標準英文典』正則英語学校出版部、1934。

¹² “By voice we mean different grammatical ways of expressing the relation between a transitive verb and its subject and object. The two chief voices are the active (he saw) and the passive (he was seen).” (p.112. 下線一筆者)

とし、まずは齋藤文法とその周辺の文法書について、さらなる検討を進めたい。

4.3 ブリンクリーによる英文法書について

ここでは、まず、慶応3年(1867)、日本の海軍砲術学校のお雇い外国人教師に就任したブリンクリー¹³が著した英文法書『語學獨案内』¹⁴について考察する。本書には序文にあたるものではなく、また、目次もない。各ページが横割りで四区分の線が引かれ、それぞれに例文(句)、ならびに文法についての附註(数行の解説)を交互に記す形をとる。今日の文法書に見られるように、項目が単元別に扱われるのではなく、例文(句)に沿う形で文法についての説明が縦書きで記述され、他方、それぞれの例文は横書きとなっているのである。また、例題では平易な会話を主としていることに加えて、かなりのページが発音習得に割かれており、さらに、発音が逐一、片仮名で示されていることから、日本人学習者への深い配慮が窺える。管見の限りでは、この時期に刊行された英文法書で、発音表記に配慮したものは他に類がなく、学習者に大いに裨益したであろうと推察する。以下、ブリンクリーによる *passive voice* についての解説からの引用である。

Ⓧ他ノ働キヲ請ルヲ英語ニテハ *passive pas-siv.* パスィフ *verbs.* [sic] 即 (請方働詞うけかたどうし) ト云ヒ之ヲ組立ルニハ *be* ヲ助働詞ニシテ其下ニ本働詞ノ過去分詞ヲ附置スルナリ (中略) 三編、pp. 4-5

ⓎThey teach the scholars at the polytechnic school mathematics for the first year.

ⓏThe scholars at the polytechnic school are taught mathematics for the first year.

工學寮デハ初年ノ間生徒ニ算術ヲ教マス (中略)

Ⓩ第一ノ如キハ(教ヘル)ト云働キ方働詞ヲ其儘用ヒ其主格トシテ *they* ノ代名詞ヲ設クルニテ第二ノ如キハ其働詞ヲ(教ヘラル)ト云請方ニ變へ而シテ先ニ働キ方働詞ニテアリシトキ其働キノ移ル(生徒)ト云詞ヲ請方働詞ノ主格ニ成ス等ノ如シ¹⁵ (下線一筆者) 同、p. 9

ここでは、今日の「態」を「働詞」の一種として扱い、その例として<教ヘラル>と<教ヘル>を対比させ、前者に「請方働詞」、後者には「働キ方働詞」という訳語をあてがっていることが確認できる。さらに、本書より34年後、ブリンクリーは、改訂版『新語學獨案内』¹⁶を著した。次に、その当該箇所についても引用の上、これに検討を加えたい¹⁷。

學生ハ既ニ二種ノ働詞即チ他働詞及自働詞 (19参照) ¹⁸ヲ學ビタレドモ茲ニ尚ホ一種即チ受働詞(*Passive Verbs* パスィフ) ヲ知ラザル可ラズ、例ヘバ「子ガ犬ヲ打ツ」又ハ「犬ガ子ニ打タル」ノ二句ヲ見レバ前者ノ「打ツ」ハ他働詞ニシテ後者ノ「打タル」ハ受働詞ナリ、畢竟孰レモ犬ノ打擲ヲ受クル結果ヲ表ハスニ於テ同一ナリト雖モ一方ハ子ノ打ツ働作ヲ

¹³ フランシス・ブリンクリー (Francis Brinkley, 1841-1912) は、イギリス (アイルランド出身) のジャーナリスト。後に海軍軍人となった。イギリス砲兵中尉として横浜に来日すると、勝海舟らに見いだされて海軍省のお雇い軍人となり、日本の海軍砲術学校の教師に就任した。

¹⁴ 『英囀砲隊士官ブリンクリー氏著 語學獨案内』(初版)、1875。本書は、外国人によって日本語で書かれた最も古い英語学習書の一つであると考えられ、三編(初編印書局刊; 二編、三編 日就社刊)から成る約1000頁の大作である。訳者を介すことなく、すべてブリンクリーによる編纂であろうと考えられる。それは、ブリンクリーが、これより30年後に上梓された改訂版『新語學獨案内』の「序」において、日本語の運用力がより確かなものとなったので、さらなる改訂版を出版するに至ったと述べているからである。くわえて、ブリンクリーの妻は田中安子という日本人であり、さらに、彼が数学教師を務めていた工部大学校の生徒に齋藤秀三郎がいたことも判っている。こうした事情がブリンクリーに、より正確な日本語での著述を可能にしたと推定されよう。なお、調査の過程で、ブリンクリーと齋藤の共著による文部省検定済み教科書が出版されたことが判明した。H. Saito and F. Brinkley, Capt. R. A., *The World's English Readers*, 5 vols., Tokyo, 1911.

¹⁵ 本書では各ページを横割りで4区分し、これに上段より、解説を縦書き、その例文(句)を横書きとし、これを交互に4段階で示す。なお、漢字にはすべて平仮名が附されているが、引用の際、これを省略した。

¹⁶ エフ・ブリンクリー著『新語學獨案内』三省堂、1909。

¹⁷ 同書<第六十九章 *Passive Verbs*. 受働詞 362>より抜粋。

¹⁸ 19参照という番号が付されたのは原文のまま。この数字は、原書の項目番号を意味する。

主トシテ言ヒ、他方ハ犬ノ打タルハ 事實ヲ主トシテ言フモノナリ、即チ前者ノ他働詞ナルニ 對シテ後者ヲ受働詞ト云フナリ、(中略)

The child beats the dog.子ガ犬ヲ打ツ

The dog is beaten by the child.....犬ガ子ニ打タルハ (中略)

受働詞ヲ形作ルニハ be ヲ助働詞トシテ其下ニ本働詞ノ過去分詞ヲ具置スルナリ

(下線一筆者) pp. 503-504

『新語學獨案内』は、上の『語學獨案内』(1875)に比べ、不十分ではあるが、今日の英文法書の体を成しているように思う。本書では、前掲書で用いられた訳語「請方働詞」「働キ方働詞」が、それぞれ「受働詞」「他働詞」という訳語に取って代わられていることが確認できる。因みに、ブリンクリーによる新旧の文法書(『語學獨案内』ならびに『新語學獨案内』)は、共に「動詞」ではなく、「働詞」という訳語を用いている点に注視したい。また、前掲書(1875)では、passiveの発音について pas-siv.「パスイフ」とルビを振っているが、本書(1909)では、passive verbs「パスイフ」と訂正されている。ブリンクリーの日本人学習者への配慮が、こうした些細な点からも窺えよう。

英文法書を執筆するにあたり、ブリンクリーから多大な影響を受けたであろう齋藤は、しかし、『齋藤新標準英文典』(1934)の中で、ブリンクリーが用いた「受働詞」「他働詞」ではなく、「受動態」「能動態」という訳語を用いた。ブリンクリーが、passive とは、「他働詞」「自働詞」と共に、「働詞」という文法範疇に含まれるもので、これを passive verbs「受働詞」と考えているのに対して、齋藤はこれを「動詞」という文法範疇とは別の<形態>と捉えているわけである。このことから、齋藤文法における訳語「受動態」の由来をブリンクリーが著した二書のいずれにも求めることはできないという結論が導かれる。

4.4 神田乃武が著した英文法書について

齋藤とブリンクリーが知己の間柄であったことは、先述のとおり、事実だと認められるが(脚注14参照)、このことだけでは、齋藤が文法書を著す際にブリンクリーの文法書に依拠したことの十分な証左たり得ない¹⁹。くわえて、上の検討結果から、齋藤が用いた「受動態」という訳語がブリンクリーに由来する可能性は否定された。

そこで、本節を終えるにあたり、参考までに、齋藤文法と同じく明治中期を代表する神田乃武の文法書²⁰における passive voice の位置づけと訳語について調査を行い、その検討結果と齋藤文法とを照合することで、神田による文法書と齋藤文法との関わり、あるいは、齋藤が「受動態」という訳語の使用を決定する上で神田から受けた影響の有無について考察したいと思う。以下、神田による上述の文法書より、当該箇所を引用する²¹。

A transitive verb is in :

(1) the Active Voice when it represents its subject as the **agent of the action**.

He teaches me. You must punish him.

(2) the Passive Voice when it represents its subject as the **recipient of the action**.

He is taught by me. You must be punished by him. (下線一筆者) (中略) p.78

I teach him. = He is taught by me. (中略)

They have caught a thief. = A thief has been caught by them. (中略)

斯ノ如ク Voice ヲ轉ズルニ當リテハ Tense ト Mood トハ決シテ變ズ可カラズ。Number, Person ハ場合ニヨル。 p. 79

¹⁹齋藤が多大な影響を受けたとする人物については諸説あるが、ここで、大村喜吉による見解を引用する。

「齋藤文法は Gould - Swinton - Dixon の三要素から成立しているといわれる。グールドとスウィントンの影響に関しては若干の疑問が存するが、ディクソンの齋藤に与えた影響に就いては何人と雖も之を否定することは出来ない。」(『齋藤秀三郎伝—その生涯と業績—』、吾妻書房、1960、p. 43)。

²⁰N. Kanda, *Intermediate English Grammar*, Tokyo, 1899.

²¹上掲書 CHAPTER V.—THE VERB. § 6. — VOICE.

神田は、transitive verb には active voice と passive voice という 2通りの用い方があるとす
る。しかし、それに続く日本語の解説文において、これらの文法術語に対する訳語については、
いずれも確認できない。

さらに、南日恒太郎が著し、神田乃武が校閲した、当時の中学校の上級生又は高等学校入学志
望者の英訳自習用を主眼とした教本がある²²。以下、その<第二編 和英文の相違 第三項 Voice
に於ける相違>からの引用である。

和文には主として働詞の active voice を用ふと雖も英文には其の passive voice を用ふること
頗る多し。

1. {此像は運慶の刻みし所なり。This statue was carved by Unkei.} 即ち『(何々/名詞) は
(何々/名詞) の (云々/他動詞) する所なり』の如き式の和文に於ては『(云々/他動詞) する
所なり』を passive verb に譯し、之に應じて『(何々/名詞) は』を subject とし、『(何々/名
詞) の』を agent を示す adverbial phrase とすべし (下線一筆者) p.39

本書においても、今日の定訳である「名詞」「(他) 動詞」という訳語が用いられていることが
確認できるが、それ以外の文法術語については、すべて英語で記されている。神田はなぜ、voice
をはじめ数種の文法術語について訳語を用いずに、英語で記載したのであろうか。これらの文法
範疇に対する適切な訳語を決定しがたい要因があったとすれば、それはいかなるものであろう。
それとも、敢えて英語で表記すべきだとの考えがあつてのことであらうか。この疑問を解決する
ための一つの手がかりが、神田が著した英文法学習初心者向けの教科書の序文の中に見出される²³。

The Definitions²⁴ are given in English, not so much to lead them to be memorized as
to familiarize the student with grammatical terms.

神田は、当時の学習者が単に文法事項を暗記するのではなく、英語の文法術語に慣れ、十分に会
得するように、敢えて訳語を用いなかっただけである。彼が上述の文法書(脚注 20 参照)におい
て、voice その他の文法術語を英語で記したのも、そのような意図があつてのことではなかろうか。

以上の調査の結果、齋藤文法における定訳「受動態」は、ブリンクリー・神田・南日のいずれ
の文法書にも由来しないという結論が得られた。してみると、その起源は、先述の拙稿において
考察した英学初期の英文典の中で、「受動態」という訳語の使用が唯一、確認されるものに求めら
れると考へてよからう。

5 おわりに

本稿では、齋藤文法における passive voice の位置づけと定訳「受動態」について考察したが、
これに先立って、筆者は、英学黎明期から明治初期の英文典を対象として、「受動態」という訳語
を初めて用いた文法書を特定すべく調査を行った。その結果を纏めたのが先述の拙稿である²⁵。
その結論に記したように、当時の英文典の中で passive voice を「受動態」と訳しているのは、慶
應義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』²⁶ただ一つである。したがって、同書こそが、「受動態」
という訳語を用いるにあたって齋藤が依拠した英文典であらうと、筆者は推定する。しかしなが

²²南日恒太郎著・神田乃武校閲『分類詳解 和英文譯法』有朋堂、1904。但し、本稿では、1907年刊の増訂版を参照した。

²³『English Grammar for Beginners』三省堂、1900。

²⁴たとえば、同書<CHAPTER VIII. — VOICE.>においては、voice の定義が以下のように英語で記されている。

(1) He knows it. (2) It is known by him. (中略) Definition. — Voice is a modification of the transitive verb to denote whether the subject represents the actor or the recipient of the action.

(1)ノ如ク subject ガ働作ノ主ナル時ハ verb ハ Active Voice ニシテ、(2)ノ如ク subject ガ働作ノ受身ナル時ハ verb ハ Passive Voice ナリ。(筆者一下線) pp.67-68。

²⁵注 6 を参照。

²⁶永嶋貞次郎譯、尚古堂、1870。

ら、上述の拙稿の最後で疑問を呈した点でもあるが、『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』では、active voice が「他動態 / 働キカケノ態」と訳されており、齋藤文法における「能動態」という訳語は用いられていないのである²⁷。よって、定訳「能動態」については、英文典のみならず、和蘭文典にまで遡り、その起源を究明することを今後の課題としたい。

【参考文献】

Sweet, Henry, *English Grammar, Logical and Historical*, Oxford, 1891

- 井田好治 「英文法訳語の発達：特に八品詞を中心として」『言語科学』2、九州大学教養部、1966 (pp.18-28)
「明治における英文法範疇・訳語の変遷」『言語科学』4、九州大学言語会、1968 (pp.17-25)
「薩摩の英学（三）」『英語英文学論叢』20、九州大学教養部、1970 (pp.141-165)
「『語厄利亜語林大成』の英文法論について」『英学史研究』8、日本英学史学会、1975 (pp.115-136)
- 井手裕美 「英語教育法（4）日本の英語教育—その原点—明治中期邦刊本時代の英語機定教科書の分析と検討」『太成学院大学紀要』14、2012 (pp.1-12)
- 伊藤裕道 「刊行100年齋藤秀三郎 *Practical English Grammar* (1898-1899) 管見」『日本英語教育史研究』15、日本英語教育史学会、2000 (pp.113-132)
- 岡田和子 「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷（VII）」『外国語教育論』26、筑波大学外国語センター、2004 (pp.103-121)
「『和蘭語法解（オランダごほうげ）』の原典は Peyton の英文法書か」『外国語教育論集』28、筑波大学外国語センター、2006 (pp.163-176)
- 北山長貴 「齋藤秀三郎著『英文法初歩』について（3）」『山形県立米沢女子短期大学付属生活文化研究所報告』38、2011 (pp.1-19)
- 齊木美知世・鷺尾龍一
「Lijidend / Passive の起源」『人文』10、学習院大学出版、2011 (pp.31-50)
- 齋藤浩一 「日本の学習英文法史—「国産」文法項目を中心に」『言語情報科学』9、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2011 (pp.81-97)
- 重久篤太郎 『江戸英学史の片影』同志社高等商業学校商業研究会、1932
- 朱鳳 「馬禮遜的漢訳西書封日本的影響」『アジア分化交流研究』3、2008 (p.203-215)
- 杉本つとむ 「小関三英に関する覚書」『国文学研究』40、早稲田大学国文学会、1969 (pp.93-106)
『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985
『英文鑑—資料と研究—』ひつじ書房、1993
- 竹村覺 『日本英學發達史』研究社、1933
- 出来成訓 「明治時代の英語教科書に学ぶ（4）：齋藤秀三郎の *The World's English Lessons*」『日本英語教育史研究』5、日本英語教育史学会、1990 (pp.1-22)
- 飛田良文 「英文典直訳と欧文直訳体」『日本語の研究』41、日本語学会、2008 (pp.48-68)
- 水野修身 「明治期英文典における‘Voice’をめぐる訳語に関する考察」『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』91、2005 (pp.19-39)
- 柳浦恭 「齋藤秀三郎とスウィントン英文典」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』6、千葉経済大学短期大学部、2010 (pp.1-6)

²⁷当該箇所を引用する。日本文の順序にして読むために、各語句の下に漢数字が、付されているがここでは省略した。
「他動態ハ アル其ノ形デノ動詞於イテハ夫ニ所ノ主格ガ表ス働者ヲ譬エバ（中略）於テ働キカケノ態ニジョヌハ打チシゼ | ムスヲ 何ガルカ頭ハサ由テ受動態ニ 受動態ハアル其ノ形デノ動詞於テハ夫ニ所ノ 主格ガ頭ワス受ケ者乃チ受者ヲノ働キ 譬エバ（中略）於イテ受ケ身ノ態ニ ゼ | ムスガ打レシ由テジョヌニ」（下線一筆者）同、六十四～六十五頁。